

【待降節(アドベント1)—クリスマスを備えよう！】



聖書：マタイの福音書1:1-17

暗唱聖句：エペソ人への手紙2：8（あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。）

説教者：李淑英先生

おはようございます。先週は長屋さんが礼拝後、倒れ、その後私の不注意でシンユちゃんが三階から階段で落ちる事故がありましたが、みなさんのお祈りのおかげでシンユちゃんも守られたと信じます。これ以上事故が起こらないように牧師館のドアなど鍵を閉めさせていただきますので御理解お願いします。一週間の間も主にあって守られたでしょうか。

先生も韓国からみなさんのために祈り、早く日本に戻りたいと言っていました。

（簡単に祈る）また久しぶりに講壇に立たせて頂きました。どうか、聖霊様が御国の奥義を知らせて下さいますよう主イエス・キリストの御名によってお祈りします。

教会のカレンダーを見ると、今日は待降節（たいこうせつ）と書かれています。これだけだとわかりにくいと思いますが、よくアドベント、アドベントと言われています。聖書の辞書を調べて見たら、漢字の通り、イエスキリストの降誕を待ち望む期間としてアドベントとも呼ばれ、キリストの初臨と再臨の両方にこの「表れ、来臨」を意味する言葉が使われている、教会暦の始まりを意味し、また来臨への備えをも含むこの期間は、歴史的には復活節（イースター）に備えるレントとともに定着したそうです。最初はバプテスマを備える期間としてレントとともに覚えられたと思われ、その長さも6週間とか4週間とかいろいろあったそうです。とにかく毎年迎えるクリスマスをただ、子供にプレゼントをあげることで終わらないで、私たちが信じているイエスキリストを深く考え黙想する12月となればいいと思って今日のメッセージを準備しました。

みなさん、みなさんにもそれぞれ家門の系図があると思います。むかし、私のおじいちゃんもいつも私たちを座らせ、おまえたちの先祖はだれだれだと耳にたこができるほど、毎日教えて下さいました。自分たちの先祖を知らない者は獣にすぎないといつも言っていました。そういうわけで、毎年、お盆だけではなく、先祖たちの死んだ日を記念し、様々な法事など準備しなければならなかった長男のお嫁だった私の母はいつもなやんでいました。それほど先祖たちを大事にしていた家庭で、先祖らに拝まないキリスト教を信じていることを家族に伝えた時のその猛烈な反対はいま考えてもおそろしいほどでした。ところが、聖書を少しずつ知りながら、感じたのはキリスト教こそ先祖をしっかりと覚え、大事にする宗教もないのではないかと思いました。今日の本文であるマタイの福音書1章1節から17節までがその証拠です。よくクリスマスの時期になると18節からの内容はよく聞いているものの、いつも1節から17節までは飛ばしてきた気がしました。

マタイの福音書はおもにユダヤ人のクリスチャンで構成された教会に宛てて書かれた書です。そういうわけで、イエスキリストがアブラハムの子孫、ダビデの子孫だと始めに書かれています。キリストの誕生の前にたくさんの人々の名前があげられています。

イエスキリストの誕生の背景となるこの系図を読んでいるとまさしく神様の恵みそのものであることがわかります。ここにあげられている人々を全部調べようとするとかぎりがありませんので、何人かをあげてイエス様の系図による神様の恵みをみなさんとともに味わいたいと思います。

1. アブラハム、ダビデ

まず、1節をみるとアブラハムの子孫、ダビデの子孫だと書かれています。

みなさん、アブラハムはどんな人でしたか。ユダヤ人にとってはかかせない大切な信仰の先祖です。しかし、あらゆる面においてアブラハムの信仰の生き方がすべて模範になったわけではありません。創世記12章と20章に自分が生きるために2回も自分の妻サラを自分の妹だとうそをついてしまいます。1回くらいはまあいいかと思っただけで赦せるか分かりませんが、歳月が流れた後、再び、同じ罪を犯してしまいます。アブラハムは特別に信仰心があったから神様に選ばれたわけではありません。我々と同じように、人間的な罪を犯しやすい普通の人でした。これは、彼がすばらしい模範になったから神に

選ばれたわけではなく、ただ神様の恵みのゆえにです。恵みというのは‘受ける資格がない人に授けられる一方的な好意（こうい）’です。神様はアブラハムのすばらしい生き方や道徳性、信仰に関係なく彼を選んで信仰の先祖として立たせてくださったのです。まさしく恵みによって選ばれた人です。ダビデの場合もそうです。

ダビデもすばらしい信仰者でした。神様にまで‘わたしの心になつた者だ’と言われるほどでした。なのにもかかわらず、彼は自分の忠実な部下だったウリヤの妻バテ・シェバと姦淫の罪を犯してしまいますが、それをごまかすために、殺人やうそをつくなど次々と罪を犯してしまいます。彼は数々の戦争でたくさんのいのちを虐殺してしまいます。そういうわけで、神様は神の宮を作りたがっていたダビデにそれを許しませんでした。このようにダビデもかならずしも特別な信仰をもってすばらしく生きていた人だとも言えなくなります。それにもかかわらず、このダビデの名前がメシヤの系図に先祖としてあげられていることは一方的な神様の恵みでしか説明ができません。だからといって、人生一度は罪を犯してもよしということではありません。かならず、どこの歴史においても消すことのできない汚名になってしまうのはこの人々の歴史をとおして十分分かることだと思います。私たちの人生においても汚名になることは初めからやめましょう。それが罪だと知っていながらも、どんどん罪の世界に入り込みやすいのが人間であることをしっかり覚えて祈って生きたいと思います。

2. 四人の女（タマル、ラハブ、ルツ、ウリヤの妻）

イスラエルの系図に女たちの名前が載せられたということは本当にまれです。これはユダヤ人たちが守ってきた伝統を破る例外的なことでもあります。しかし、イエス様の系図に女らの名前が載せられたということも不思議ですが、さらに彼女らはすばらしく、立派な女たちではないことにまた驚かされます。まず、**3節にタマル**という女が出ます。ユダによって、タマルからパレスとザラが生まれたと書かれていますが、これは普通の夫婦関係から生まれたわけではありません。その内容は創世記38章にくわしく書かれています。ヤコブの息子の一人だったユダには二人の息子がいましたが、その息子たちが若い頃、二人とも死んでしまいます。残された嫁の一人がタマルです。いまも中東地方では女はベールをかぶって顔を隠して生活していますが、当時もそうでした。ある日、ユダは自分の嫁だったタマルを町の遊女だと勘違いし、彼女に入って、みごもらせませす。三ヶ月たってから、夫のいない嫁タマルの妊娠の知らせを聞いて、姑（しゅうと）だったユダはひどく怒り、タマルを殺そうとします。殺されそうになったタマルは自分を妊娠させた人は自分のしゅうとだったユダであることを証拠をみせながら知らせませす。道徳的には考えられないことですが、これによってタマルからパレスとザラが生まれたのです。

次は5節に出てくるラハブです。彼女はエリコという町で体を売っていた遊女でした。そんな遊女からダビデのおじいちゃんのおじいちゃんであるボアズが生まれます。

次はルツです。イエス様の系図に出てくる女の中で一番賢淑で美しい女です。しかし、彼女は異邦人であって、姑であるナオミの息子だったマフロンの妻でした。ルツ記にくわしく事情が書かれていますが、夫だったマフロンが死んだのにもかかわらず、ルツは姑（しゅうとめ）であるナオミと一緒にベツレヘムにまで来て、ユダヤ人のボアズからダビデ王のおじいちゃんが生まれるのです。異邦人がユダヤ人の系図に載せられたことだけでも破格的（はかくてき）だと言えます。申命記7章1節から読んでみると神様はイスラエルの民族をカナンという新しい約束の地に入らせ、そこで神様の祝福をいただく民として一切の異邦の文化に染まらないため混血がないように厳しく命じておられました。異邦人との結婚を禁じられた神様の命令をやぶったマフロンがルツと結婚したことは確かな罪でした。ルツの個人的な人生そのものがどんなにすばしかったとしても彼らは神様の命令をやぶったわけです。なのにもかかわらず、彼女の名前がイエスキリストの系図に載ったのです。

次はウリヤの妻です。結果的にはダビデの妻になるのですが、イエス様の系図にはウリヤの妻だと書かれています。バテ・ショエバだとも言われず、ウリヤの妻だと書かれているのですね。ダビデと姦淫の罪を犯した女でした。何千年の歴史の中で、数々のメッセージの中であげられる名前です。強調しなくてもいいほどだと思います。

四人の女の中で三人が異邦人でした。彼女らの身分すらあまりよくなく、その当時世紀のスクンダルを起こした張本人（ちょうほんにん）たちでした。みなさん、いままでの話を聞きながら何を感じていますか。

人々は自分の過去を隠しがります。しかし、イエス・キリストのすばらしい系図には、汚れたまま、

暗かった過去をもっている女らがそのまま登場します。その理由は为什么呢。いったいなぜ神様はこれらの出来事を許したと思いますか。それは一言でいうと恵みです。このような人々を通して来られたイエス様が本当の意味で罪人の救い主であられる事実を表すすばらしい恵みの歴史ではないかと思います。

あともう一人の女が書かれています。16節マリヤです。イエスキリストを生んだ母マリヤです。イエス・キリストを生んだことを除いてはマリヤはごく普通の女でした。

カトリックでは偉大なイエスを生んだ者としてその母マリヤまで偶像化してしまっていますが、聖書ではマリヤをどのように表していますか。ルカの福音書1章26節以下は御使いガブリエルがマリヤに告げる場面です。(26節—28節まで)特にマリヤに‘おめでとう。恵まれた方。’だと告げています。マリヤは恵みを受けるべき女であって、また恵みを受けた女でした。マリヤは恵みを受ける者であって、恵みを与える者ではありません。マリヤにも救い主が必要でした。確かにイエス様はマリヤが生んだ子であることは事実ですが、しかし、同時にマリヤの救い主でした。つまり、マリヤも同じく罪人の人間にすぎないのです。すると、ごく普通の女であったマリヤが選ばれた理由は何でしょうか。これにも多くの人々の救い主として来られたイエスキリストの象徴的な選択だったことが分かります。この選ばれたマリヤをとおしても神様の一方的恵みを感じることができます。最後にイスラエルの歴史においての神様の恵みについて一緒に考えて見たいと思います。

3. イスラエルの歴史に表される神様の恵み

本文の17節を読んでみましょう。

“それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまでが十四代になる。”

これはイスラエルの歴史を主に三つの時期に分けています。第一期がアブラハムからダビデまで、第二期はダビデからバビロンの捕虜になる時期、第三期はバビロン捕虜からイエスキリストが生まれるまでの時期です。これのそれぞれの時期が十四代だと書かれていますが、正確に言うとは十四代ではなく分かりやすくそのように分けたようです。私たちが歴史を学ぶ時、分かりやすく古代史(こうだいし)、中世史(ちゅうせいし)、近世史(きんせいし)分けるのと同じようにイスラエルでもこのように自分たちの歴史を分けるのだそうです。

まず**第一期であるアブラハムからダビデまでは**アブラハム、イサク、ヤコブの時代はたえず彷徨う歴史です。その次はモーセを中心にした捕虜の歴史です。つまり、奴隷の歴史です。

そして、**第二期であるダビデからバビロン移住までの歴史はどうですか。**もちろん、ダビデ王やソロモン王の時代は星のように輝いた時期でもありましたが、全体的に見るとサウル王の時からすでに神様に対する不従順と失敗の繰り返される歴史だったと言えます。**第三期のバビロン移住からキリストの誕生までの時期は**捕虜と挫折の時期です。メシヤによる救いの光のみが唯一の希望でした。

このイスラエルの歴史を見ていると苦難の連続の歴史です。なのに、一体なぜ神様はこの民族を選び、この民族からイエスキリストを生まれさせたのでしょうか。虫けらのように捨てられた民族、苦難と罪の暗い歴史の連続、この民族をとおしてなされる神様のすばらしい恵みをもう一度確認することができます。ユダヤ人という言葉は英語でjewと言いますが、これはいまの時代だけではなくバビロン捕虜時代からののしられる意味で使われた言葉だそうです。これほど軽蔑された民族、苦難と彷徨の民族を選び取り、そこからメシヤが生まれたということは神様の一方的な恵みでしか考えられないと思います。イエス様の系図に書かれている人々の生涯のみならず、そのイスラエルの民族の歴史に表されている神様の恵みについて感じる事ができたでしょうか。私たちがイスラエルの人々と同じように、生きる人生の目的すら分からず、さ迷っていた人生でした。罪を罪だとも知らず犯していた罪人でした。自分だけが苦難と試練の連続だと叫んでいたかも知れません。そんな私を神様は神の子として選んでくださり、光をあててくださり、祝福しようと待ってくださるのです。

イエスキリストの誕生の背景となるこの系図を通して、罪人の人間を愛し、彼らの罪と暗闇にもかかわらず、彼らを救おうとしておられる神様の恵みと愛を知ることができました。

二千年前、その暗闇と苦難の歴史の中から、罪人なる人間を救うために救い主として喜んでイエス・キリストは来られました。十字架の上での自分の死を予め御存知だったのにもかかわらず、来られたイエス・キリストがいまなお、私たちのための救い主として私たちとともにおられます。イスラエルのメシヤとして来られたそのイエス・キリストが私の救い主としてともにおられるという

すばらしい恵みを黙想しながら、感謝をもって今年のクリスマスを迎え、そして多くの人々にこの良い知らせを伝えるみなさんとなりますよう主イエス・キリストの御名によって祝福します。
アドベントの祈りを読んで閉じる。

アドベントの祈り

チェ・ジェミヨン

春を待ち望む冬のように、貧しい人々はみな
再び来られる主を待ち望みます。

飼い葉おけのように、汚れた心を空にしてきよめ
再び来られる主を待ち望みます。

主だけにささげる贈り物を用意し
再び来られる主を待ち望みます。

利益だけを追い求めていた目を閉じ
再び来られる主を待ち望みます。

握りしめていた手を開いて組み合わせ
再び来られる主を待ち望みます。

高ぶりを砕いてへりくだり
再び来られる主を待ち望みます。

騒がしい笑いを捨て、悔い改めと涙をもって
再び来られる主を待ち望みます。

失われた信仰の始めの愛を取り戻すために
再び来られる主を待ち望みます。

ひそかに捨てた私の十字架を再び負い
再び来られる主を待ち望みます。

イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン！